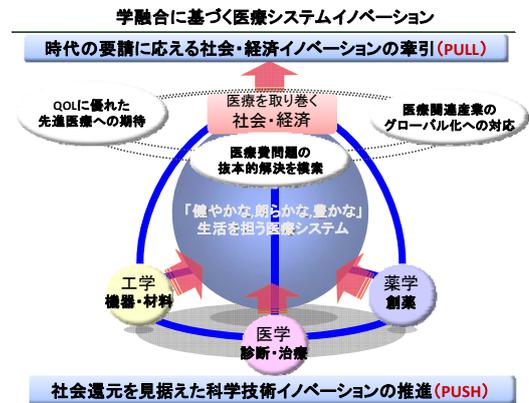


機 関 名	東京大学		
拠点のプログラム名称	学融合に基づく医療システムイノベーション		
中核となる専攻等名	工学系研究科バイオエンジニアリング専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 片岡 一則 教授	外	23 名

〔拠点形成の目的〕

日本は超高齢・成熟社会に向けた課題先進国であり、科学技術立国の中核産業としての医療関連分野への期待は大きい。本拠点では、**医学・工学・薬学の三本柱の強固な科学・技術的基盤を既に持ち、その一層の促進を通じた社会的見識と牽引力を有する人材を育成**することを目的とする。医工薬が緊密に連携する世界最先端の研究開発および先端医療を推進している現場に確固たる軸足を置きつつ、多様な事業化・産業の生の姿や現実の社会での経験を積む機会を提供する体制を形成する。育成された人材が、ナノメディシンに代表される先端科学技術を理解・推進・評価できる力量とともに、社会・経済・経営にも広い視野を持ち、社会を先導して、先端科学技術が新たに実用化・産業化される道を切り拓いていくことを目標とする。



〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕

医・工・薬及び社会還元学(経営学・環境学・法学・政策学等)系の関連専攻が協力し、東京大学生命科学研究支援ネットワーク上に構築された先行融合分野人材養成及び融合研究イニシアチブを利用・拡充して、新たな学融合教育研究の拠点形成を目指した。特にナノバイオテクノロジー関係の融合領域研究の経験を持つ若手研究者を中心に**10名の特任教員を雇用**し、執行部のもとに研究実施委員会、教育研究環境整備委員会、カリキュラム委員会、国際委員会、大学院研究支援委員会、広報委員会を設け、事業を推進した。これまでの拠点活動の進捗状況の概要は以下の通りである。

・カリキュラムの整備

医工薬社の融合領域を体系化すべく、教育カリキュラムを整備した。先端医療システムにかかわる広範な領域を体系的に学べるよう、大学既存の講義などと別個に、特任教員が中心となってケーススタディなど**独自のカリキュラム**を数多く設定していることが最大の特長である。

・共通機器の整備

医工薬融合領域研究を推進するため、**共通機器**を整備し、特任教員等による管理体制を構築した。異なった部局に在籍する利用者の相互利用のため、webを通した予約システムを整備した。

・ホームページの整備・パンフレット作成

拠点形成では外部への情報発信が重要な業務であり、日本語および英語での**公式HP**を整備した。拠点ロゴ(右参照)を作成し、カリキュラムや各種イベントの情報伝達、学生・教員などメンバーの最新ニュースの配信、上記共通機器のweb予約など、拠点についての情報が集約された情報ポータルとして活用している。またパンフレットを日本語版、英語版ともに作成し、今後拠点を志望する可能性のある学生・研究室や、学外に対しても広く配布した。



・RA制度の整備

東京大学からのRA支援を基盤に、学融合という特殊性を加味した独自の研究評価基準を設けて、その評価に基づく**研究生活基盤支援体制**を整備した。

・シンポジウムの開催

2009年2月20日に関係教員、学生が一同に会して**開設記念国際シンポジウム**を行った。4名の海外招聘講演者、学外からの参加者を含め、計300名の参加者を得た。文部科学省、厚生労働省、経済産業省の各担当者の来訪・スピーチを得た。さらに、2010年2月24日には**第二回国際シンポジウム**を開催し、2名の海外招聘講演者、12ヶ国の大使館関係者、米国公使を含めた国内外からの来賓を含め、計202名の参加者を得た。

・RA委員会の組成とニュースレター発行

拠点活動のリアルタイム発信のため、医工薬それぞれの学生からなるRA委員会を組織し、**ニュースレター**編集を行った。2009年9月に第1号が発行され、今後年数回のペースで発行を行う予定である。

・グローバル化への取り組み

海外への学生派遣および海外学生の受け入れという、**双方向的な、真の意味での国際化**を推進している。さらにシンポジウム等イベントを全て英語で実施するなど、グローバル化へ向けた取り組みを積極的に進めている。

(総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、本拠点形成計画は大学において戦略的なものと位置付けられており、また本拠点のカリキュラムによって学融合教育と学際的教育を受け、必要単位を取得した者には副学長名で本拠点の修了証を発行するなど、組織的な支援もなされている。

拠点形成全体については、研究と人材育成の両面で成果があげられている。また、拠点内に共通実験室や共通事務室を設置するなど、実質的な協力と連携が可能な体制が整っている。

人材育成面については、医学・工学・薬学の研究者で綿密に計画・立案して組み立てられた教育プログラムが実施され、成果をあげている。特に若手研究者にケーススタディを課し、知識ばかりでなく、状況に応じた実践力を養っていることは評価できる。医薬品の開発、医療面での社会還元など、社会的責任という視点からの教育は、我が国では他の先進国に比べ遅れているので、本拠点での取組みは高く評価できる。就職先についても、企業、行政を含めて多方面への対応がなされている。国際連携については学生の双方向交流など実質的な効果が得られている。

研究活動面については、ハードとソフト両面から学融合を目指した連携体制が試みられ、研究成果は国際的にも評価されている。

補助金の適切かつ効果的使用については、費用対効果をあげる努力が払われており、適切である。

留意事項への対応については、概ねよく対応しており、今後の展望についても、本拠点形成は教育・研究両面において順調に進行しているため、将来にわたる継続的な取組みが期待される。